

群馬の自然

特集 ぐんまの百名山の自然(Ⅷ)
続 奥多野の山々

No.160

2011 春

特定非営利活動法人 (NPO)

群馬県自然保護連盟

URL <http://www5.wind.ne.jp/shizen/>
e-mail shizen@dan.wind.ne.jp



コブオトシブミ

笠丸山は花と

雨乞いの山

亀井 健一

笠丸山は住居附集落の西側にそびえ立つ山である。標高は一一八九mと高くはないが、山頂部は西峰（笠丸山）と東峰からなる岩峰である。登山口はこの集落側に2か所あり、林道住居附線に何箇所か駐車するスペースがある。

4月中旬、村主催の笠丸山登山があり友人と参加した。この登山が上野村の山々に登るきっかけになった。そのときの案内人が、住居附集落に住み笠丸山を猟場とする猟師のNさんである。私より高齢らしいが、動作も言葉もきびきびした元気な人であった。

10時から、新高畑橋を渡り地蔵峠に向かつて登山が始まった。林道笠丸線と呼んでいる登山道である。私はNさんのすぐ後につき、歩きながら様々な質問をした。猟の話だけでなく、樹木や山の信仰などについても話してくれた。約60分で峠に着いた。

ここで小休止をする。峠には大きなツガが生えていて、根元にお地蔵さまが祀られてい

特集 ぐんま百名山の自然 (Ⅷ)

続 奥多野の山々

目次

表紙 コブオトシブミ
特集 ぐんま百名山の自然Ⅷ
続奥多野の山々

水村 聡子

1

笠丸山は花と雨乞いの山
思い出いつぱいの御荷鉾山
冬の諏訪山と九十の滝

亀井 健一

2
3
4

植物歳時記(53) ウメ

須田 けい

4
5
6

図鑑の内と外 植物私記(29)

神宮 開

5
6
9

テリミノイヌホオズキ

吉田 龍司

7
8
9

群馬の地質 常夏の中生代

佐鳥 英雄

10
11
12

残された自然の中で(152) 観音山鳥日誌①

飯島 静男

12
13
14

植物をミクロで見る(1) オニナルコスゲ

谷畑 藤男

13
14
15

編集からのお願い

青木 雅夫

15
16
17

平成23年度行事予定

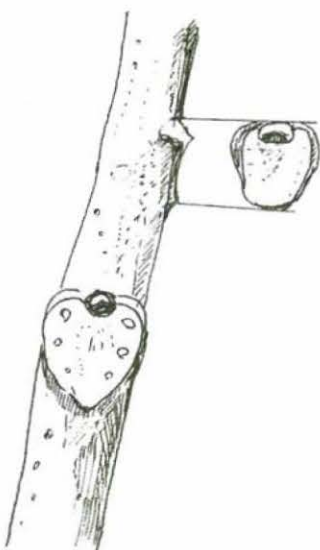
16

事務局日誌

17

事務局だより

17
18
19





笠丸山東峰の天然ヒノキ

た。峠を越えた林道は楢沢を通り、楢原に出るといふ。峠からの登山は、南東方向に伸びた尾根を進み、次に岩山の北側を巻いて、東峰と西峰の鞍部に出た。ここより右方向に進み、西峰の笠丸山（標高一八九m）に着いた。地藏峠から約30分である。

山頂で集合写真を撮り、早い昼食をとる。近くに千葉県からきたという数人がいた。高速を使えば、日帰り登山ができるのだと話していた。道路事情がよくなり、西上州の山が

秘境ではなく、手頃な山になったのだ。

Nさんを囲み、談笑しているとき、一陣の風で、私の登山帽が北側の崖に飛んでしまった。すると、Nさんが木につかまって崖を下り始めた。帽子を取ってやるというのである。私はびっくりして、危ない、やめてくださいと思わず叫んでしまった。だが、Nさんは帽子を拾ってきた。これには周りの人も驚いたようだ。こんな危険なこと、普通の人にはできないことではないと思った。

時期が早いせいか、アカヤシオもヒカゲツツジも、大部分はつぼみの状態であった。そして、東峰にある祠のわきを通り、ヒノキの林をかすめて急坂を転がるように下りた。続いて、尾根沿いにあるアセビの林を抜けて下山した。山頂から車道まで約60分であった。実歩行時間は合計2時間30分ほどである。

下山し車道に出たとき、Nさんが朝方撃ったシカを見せると言った。登山が始まる前に、笠丸山でシカを撃ち、住居附川に沈めておいたのだという。沈めておくのは、血を抜くためらしい。角を結わえたロープは岸辺の木に縛り付けてあった。3又4尖の角を持ったオスである。これには、登山者の多くがびっくりしたようだ。

この登山が縁で、花の時期にこの山を訪れるようになった。花の当たり年には、山頂やその周囲に、アカヤシオの薄紅色の花がこぼれるように咲き、その陰ではヒカゲツツジの淡黄色の花が咲いていた。また、ところどころに、トウゴクミツバツツジの紫紅色の花が群れていた。笠丸山を舞台に花の競演を見る思いであった。まさに花の山である。

Nさんとは親しくなり、お宅を訪問したり、電話で話したりすることがある。シカの角、イノシシの頭骨や牙を、教材にするためにもらった。シカの肉を、断りきれず、山ほど頂戴し閉口したこともある。家内からは貰わないでと言われてしまった。

笠丸山にまつわる話を幾つか挙げておこう。

○東峰の山頂から北側斜面にかけて、ヒノキが集中して生えている。ここだけ集中しているのだから、植えたものかと思った。Nさんによると天然のヒノキであるという。後でわかったのだが、上野村誌の「植物編」にもその説明されていた。植物編は須藤志成幸氏が執筆したものである。西上州の山々には山頂部や岩稜地に天然ヒノキが多いが、そのよい例になると思った。

○地藏峠を通る道は生活道であった。昔、車

がない時代は、住居附と楢原を行き来する場合は、この峠を通ったという。乙母^{おとも}と乙父^{おちち}を通るよりずっと距離が短いからである。地蔵峠にお地藏さまが安置されているのは、この道を多くの人が利用したことを物語っていると思う。

○笠丸山は雨乞いの山。土用の頃、雨が降らないためにコンニャクなどがしおれて、農作物が水をほしがっているとき、雨乞いの儀式が乙父集落の代表者により行われた。笠丸山の中腹に水がわき出るところがあり、タケ筒に水を汲み、神流川の川原に立てた。そして、お神酒と灯明を上げ、雨乞い唄を唱和してぐるぐる廻り、神様（竜王）に祈ったという。

○笠丸山の名の由来は。その山容から美濃笠に見立てて、笠丸山と呼んだと言われているそう。本県だけでなく全国に笠ヶ岳の名の山は多いが、この山名も山容からつけられた名と聞いている。昔の人は、尖った山容から笠を連想するようだ。

○狩猟の案内をするNさんは、猟犬を飼っている。都会から来るハンターが、猟ができるように案内をしている。犬を使って獲物を追い出し、ハンターが撃てるようにするのだという。慣れないハンターでも事故を起こさず、

猟ができるようにしていると話していた。○Nさん宅ではオスのイノシシを飼育していた。捕獲したウリボウである。そのうち村に提供するのだと話していた。イノブタをつくる際のタネイノシシに使うらしい。今は精液を採取し、凍結しておいて、必要なときメスブタに使うという。多産のメスブタを使うのだ。

思い出いっぱいの 御荷鉾山

須田 けい

塩沢峠から石ころ道を東にどのくらい行っただか：木を切り出している最中で、大変な工事をしていて、そんな現場の傍らの山中で見たのが初めてのアケボノスミレでした。その時は、知人に車で連れて行って貰った初めての山道だったこともあって、はつきりとした地図を頭に描くことは出来ませんでした。後に、あれはスーパード林道を造るための工事だったのだという事がわかりました。アケボノスミレの印象は強く、春になると思い出す場所となりました。

数年後、（御荷鉾山からの初日の出を見た

い！）という気持ちが大きくなって、家から何分でもいいだろうかと、どの道を行けばいいのかと散々思い悩んだ末、何とかなるわ！と暗い夜道を（私のバイクは125cc・非常に暗いライトでした）走り出したのは1991年の大晦日の事でした。初日の出が見られるという気持ちよりも、無事にいけるかどうかや暗い夜道を走るドキドキで、気分がよかつたのかどうなのか今では思い出せませんが、不安が大きかったことだけは確かです。藤岡から神流川を渡ってしまったことに気づいて、（シマッタ！）と思い、どの道を走ったのか金鑽神社の雑踏を掻き分けて通りぬけた事を思い出します。

御荷鉾山の登り口についたときには、ぼんやり景色が見えるくらいに空の色は変わってきました。車が何台ありましたが、もちろん誰もいません。歩く準備をしている間にも辺りは明るくなってきました。もう日の出は諦めました。ここまで来たのだからと登るだけは登りましたが、何の感慨もなく、ただ頂上を踏んだだけの御荷鉾山でした。帰りの林道がテラテラのアイスバーンだった（行く時にはまったく気がつかなかった！）シヨックで頂上からの景色やどんな人達がいたのかもみ



諏訪山へ続く山道

んな吹っ飛んでしまった元旦の山でした。
花を求めて通ううちにフレンドオブ鮎川の
皆さんと仲良くしていただき、観察会にも誘
われ、ゴミ拾いで御荷鉾山に登る機会を得ま
した。2007年7月1日のことです。
山頂にはニッコウキスゲが咲き乱れ、途中
のコアジサイやヤマボウシにも歓声があがっ
ていました。平らな頂上には西にも東にも不

動明王が祀られていて、昔からの信仰の深さ
がうかがえます。その日の山頂では、いまを
盛りと咲き誇るニッコウキスゲをバックに、
オカリナコンサートがくり広げられていまし
た。360度の景色を楽しみながらその音色
に聞き惚れ、懐かしい歌に口ずさみ、今まで
にない山上の楽園の空気を楽しんだのでした。

冬の諏訪山と

九十の滝

神宮 開

西上州には諏訪山は上野村と神流町に2座
ある。両山とも「ぐんま百名山」に選定され
ている名山である。

2月20日、神流町の諏訪山と九十の滝に行っ
た。諏訪山への登山口は、国道299号線志
賀坂トンネル入口と間物登山口の2箇所にあ
る。当日は朝から薄曇であつたが風もなく、
神流町中里のデジタル温度表示板は9度を表
示していて穏やかな良い日であつた。雪山登
山は久々であり、安全を考えて尾根コースを
登ることにする。このコースは昨年9月、仕
事の関係で下見していたので、谷コースは避
けて尾根コースを選んだ。

志賀坂トンネルの右側に駐車場があり、志
賀坂高原森林公園の大きな看板が立っている。
看板には尾根コースと谷コースが記載されて
いて明確である。朝10時、案内看板の前を直
進する。直ぐに尾根コースと谷コースの分岐
点で、右に行くと谷コース、左は尾根コース
である。

尾根コースに入ると直ぐにスギの植林地と
なり、ジグザクの道を登っていく。スギ植林
地の入口には中里村林業研究会が昭和52年12
月に実施した間伐の学習林の看板があり、44
年生と62年生の立派なスギの森林である。

植林地を過ぎると尾根道となり、アカマツ
カラマツの造林地が続いていて鉄塔下に出る
比較的ここまでは雪も少なく歩きやすい

ここを過ぎると急登となりピークを2箇所
越える。積雪量も20cmと多くなり時間も予定
より要した。尾根は県境で、右側は群馬県、
左は埼玉県である。踏み跡もない真白な道が
行手を塞いでいる。振返って見ると自分の足
跡だけが、立っている位置まで続いていて感
動を覚える。登山の醍醐味とはこういうこと
なのだろうか。前方に二子山の岩峰が間近に
迫って見える。多野藤岡地区の7万5千分の
1の地図を広げると、下久保ダムを通り

県道71号線土坂峠より杉峠、坂丸峠、矢久峠、志賀坂峠と4の峠道が記載されている。昔の人達は雪の峠道を厭わず、生活の場として暮らしてきた苦労が思い起こされる、考えを新たにしたいひと時であった。

アセビ、アカヤシオ等、樹林の坂道をフィックスロープ頼りに進むと、谷コースとの合流点に出る。積雪量はここにきて30cmと多くなり、歩く速度は倍近くかかる。帰路の時間が心配になり、今回はここから往路を降ることに決する。

アセビの尾根の降りで、登りの自分の辿った足跡が何故か黒くなっているのを見つける。最初は砂粒か樹皮の断片でも飛んできて風で踊っている、と思ったがどうも違うようだ。近づいて猶もみると1mm程の黒い物がピョンピョン雪の上を跳ねている。どうやら虫のようだ。足跡の窪みに100匹以上いる。この寒い時期この虫はどのように生きているのであろうか。疑問符が頭をよぎると同時に自然の不思議さを実感し感動する。

帰路早めに下ったので余裕があり、登りでは見ることの出来なかったシカやウサギ、テンの足跡や、シカの食痕が目に残る。ヤマツツジ、コメツツジの枝先の冬芽や、スゲの株

の中央部を喰った痕跡が見られもした。足跡から判断すると大きな雄ジカと推測する。

志賀坂登山口を出発して、12時30分、沢コースと尾根コースの合流点に到着後ここより往路を引き返す。駐車場には2時30分到着。厳冬期、県境尾根の雪道を歩き、秩父に繋がる多野山系の威厳ある自然の中のひと時を過ごせたことを幸せに思った。帰路、間物登山口付近を散歩していた老婦人に、九十の滝は、どの位で行けるか聞くと、歩いて30分位だという。入口の道端に車を止めて徒歩で行ってみることにした。

国道299より約400mほど林道が整備され、猪平第2ダム駐車場まで除雪されている。4WDであれば10分位で行くことが出来るが、歩いていても駐車場には20分で着いた。

九十の滝は、第2ダム上に架かる「わた戸橋」の上から見る事が出来、「わた戸橋」より上流約150m位の所に落差30mの滝が断崖から荒々しい岩肌を伝わって流れ落ちている。冬場は氷結して、夏の数倍もの巨大な幅の水漠となつて見るものを圧倒する。今流行りのアイスクライミングの場所となっている。

駐車場より5分位で第2ダム上部に架かるわた戸橋に着き、橋の中央部より九十の滝の

全景を観ることが出来た。素晴らしい水漠なので写真に撮る。アップで撮影したら滝の中央に人がいるのが見え、上部と下部に一人ずつ確認できたが、多分3人パーティでアイスクライミングをしているのだろう。帰り際駐車場を覗くと八王子、所沢ナンバーの車が2台駐車していた。冬の志賀坂峠道も良く除雪され、他県の人でも容易に通行でき、見事な水漠を楽しめるのは真に幸いである。



氷結した九十の滝

植物歳時記 (53)

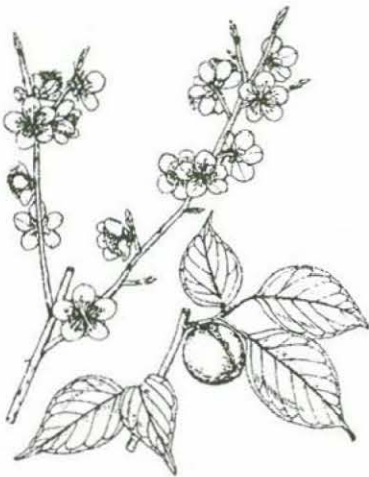
ウメ (梅)

吉田 龍司

梅咲きて惑いをよそに酒を酌む 龍司

昨年は猛暑で晴天の日照量が多かったせい
か、梅の開花は一月と早かった。しかしその
後の寒波で花の盛りが送れている。日本人は
殊の外梅を好む民族であり、古より花と言え
ば梅を指し親しんできた。

ウメが日本に渡来したのは奈良時代以前で、
遣隋使 (607年) か遣唐使 (630年) が
持ち帰ったらしい。長崎県の平戸の梅崎が最
初の栽培地だという口伝があると養田忠二氏
が書いている。しかし日本原産説もあった。



『花木園芸』の著者宮沢文吾博士はその著書
の中で、大分県や宮崎県などの九州地方の一
部にウメの自生地があることを信じていると
言い、牧野富太郎博士の『日本植物総覧』の
ウメの項にも産地として九州、台湾と記して
いる。また伊藤圭介博士は東京学士会雑誌第
四編に豊後の国や甲州の富士川沿岸にも自生
がある旨の論旨を掲載されているという。し
かし今は日本の自生説は影が薄く原産地はや
はり中国の河北省、陝西省、四川省あるいは
雲南省ではないかという説が有力である。

日本自生説が出た所以は、九州の一部で野
生化しているところからのものである。

日本の書物にウメの名が出た最初は、『懐風
藻』(751年)である。『万葉集』に登場す
る植物は約160種あり、その中ウメは11
8種詠われ、サクラの40種の3倍であり、ハ
ギ141種に次いで多い。その頃から観梅
が行われ、花といえば梅を指した。大伴旅人
が32人集めて詠んだウメの和歌が、万葉集に
収められていることから伺い知れる。万葉
集は遅くとも790年には成立しているのだ
7、8世紀にかけてウメは急速に広がっていっ
たようである。

ウメの名の由来については3説がある。

- 1 熟實。貝原益軒の『日本釈明』、新井
白石の『東雅』など熟實の転訛から。
- 2 烏梅。賀茂真淵の『古今和歌集打聴』
に燻べ梅からきたもの。
- 3 梅の呉音「ムイ」または「メイ」の転
訛で朝鮮語の「マイ」に由来した説であ
る。

ウメはバラ科で、学名はプラナス・ムメ。
プラナスとはサクラ属でラテン語の古名のス
モモが語源、ムメは和名の梅からつけられた。
ウメは高さ5、6mの落葉小高木。葉は互生
し花は2、3月に葉の展開前に開花する。花
には芳香があり、普通5弁の白色の花をつけ
る。雄蕊は多数あり花弁より短く、雌蕊は1
個で6月ごろ直径2、3cm、ピロッド状の微
毛に覆われた実を結実する。この実が梅干な
どに利用される実であることは周知の如くで
ある。気品があり、香りも高く日本人好みの
植物であり昔から歌人、詩人に愛されてきた。
鶯宿梅、飛梅、箴の梅など多くの伝説がある。
鶯宿梅の故事「ある時宮殿の前の梅が枯れ
てしまった。その時の天皇(村上天皇)はこ
れを残念に思い代わりの木を探させていたが、
ある屋敷で良い梅の木を見つけそれを勅命で
宮殿に献上させた。そしてその木を植えて見

たところ、屋敷の女主人の書いた歌が紙で結び付けてあり、「勅なれば、いともかしこし鶯の宿はと問はばいかたえむ」とあつた。歌の心を知る天皇は梅の木を元の屋敷に返したというほのぼのとした話である。

簀の梅の故事「寿永3年（1184）源平、生田の森の合戦で梶原景季が簀（矢を入れ背負う武具）に梅の枝を挿して風流に戦った。

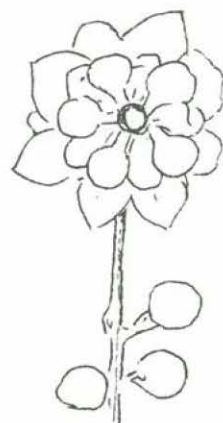
関東では水戸、小田原、熱海。関西では月ヶ瀬、賀名生、和歌山南部などの梅林が名所として知られている。庭園に植えてもよし、盆栽と呼ばれる鉢植えも風情がある。

ウメの別名を拾ってみると牟女、棗、百花魁、好花木、春告草、香散見草、風待草、句草、木花とたくさんある。また漢名の表記でも天下尤物、世外佳人、君子香、状元花、香雲、白玉條、清友、清客、玉奴、駅使等があり、古人は西洋では考えられない詩的な文学表現を操ってきた。

中国ではウメは四貴四得ありといい、詩に詠み画に描いてきた。「梅は花の兄、菊は花の弟」という諺も、百花にさがけて咲く梅と、1年の最後を飾る菊の花を兄弟に譬え表現したものである。「梅は百花の魁」という諺も然りである。また「梅が香を桜の花を匂わせて、

柳の枝に咲かせて見たい」とは、望ましいものを一所に集め、理想を現実に適えたい願望の譬で、「桜伐る馬鹿、梅伐らぬ馬鹿」桜は枝を払うと枯れるが、梅は枝を払うとなおも成長する譬え。「梅に鶯」は絵になる取り合わせで、「梅と桜を両手に持つ」は両手に花の譬えである。「梅の木分限、楠分限」梅は1年に1丈も成長するが、大木にはならない。楠は1年に1寸しか成長しないが後に大木になる意で、急に伸びた成金と、少しずつ着実に増やしていく身代を表現している諺である。「梅田、枇杷麦」は梅の実が沢山採れた年は水田が豊作で、枇杷の実の多い年は麦が多く収穫できる譬えだという。

梅干に関わる諺では、「梅はその日の難逃れ」は梅干を朝食べると霍乱に罹らず災難逃れの俗語。「梅干と友達は古いほどよい」「梅を望んで渴を止む」酸っぱさを思うと自然に唾が出て一時凌ぎになる。「梅を食うとも核食うな、中に天神寝てござる」天神とは学の神とされた菅原道真で、梅の核を食べると学を忘れるという俗語、昔の子供はよく核を嚙んで歯を欠くのでその戒めと言える。このことに纏わる有名な故事に菅原道真の飛梅がある。讒言によって大宰府に流され、京の住居に植



えてあつたウメとの別れを惜しんで詠んだ「東風吹かば匂い起せよ梅の花主なしとて春な忘れそ」があり、天満宮には梅が彼を慕って飛来した有名な伝説で、名所となっている。

梅は烏梅が語源の一つであると記したが、日本薬局方の生薬名に烏梅と梅エキスがある。

烏梅は未熟の果実の果皮を除き燻製にしたもので、酸味が強く、下痢、嘔吐、消化不良、健胃腸剤として用いられ、また解熱発汗、鎮咳剤、回虫駆除剤としても効果がある。

梅肉エキスは青梅を瀬戸物のおろし金で摩り下ろし、果汁を搾り、天日又はとろ火で蒸乾し水飴状としたもので、その際、金属製品や竹箸を用いてはいけないという。この方は小児疫痢、急性下痢、熱性下痢に効く。

梅は花を愛でるだけでなく、実が日本人の生活に欠くことのできない関わりを持つもので、前述の生薬然りで多大の貢献をしている植物である。梅の実はクエン酸、リンゴ酸などを含んで酸味の強いものだが、酢、醬

油など調味料の醸造がなされなかった以前は、塩とともに梅酢が調味料の基本だった。そして「塩梅」という言葉が生まれた。しかしこの梅の実も、未熟なものは青酸を含んでいるため、生で食べると中毒して腹痛を起こすので注意を要する。

桜花の塩漬けを桜湯としてめでたい席のお茶代わりとすると同様に、梅花も塩漬けして湯を注いで飲物とする。しかし何といっても最たるものは「梅干」である。梅の実を乾燥し、さらに紫蘇を加えて紅色を抽出したもので、古来、薬、食とともに特効があり、最も簡単に実用的な保存食品として重用されてきた。民間薬としては梅干を炭火で黒焼きにして、熱湯を注いで飲用すると風邪薬として効果がある。今でも民間療法として利用されている。古来梅干を漬け損じると、その家に凶事があると戒められた。梅漬けは主婦の資格の一つに数えられたものだ。梅干を漬け始めたら三年連続して漬けねば、その家に良くないことが起こるといふ言伝えがある。後者は一理あり、梅干は三年以上の古いものほど鹹味が中和されて風味が細やかになる。順送りに古いものへと使用させる習慣付けの方便としたものであろう。

梅を漬けた汁を梅酢といい、調味料としても良い。砂糖を加えて湯を注ぎ飲料とする。き生の梅酢を盃一杯飲むと整腸剤としても効き目があると言われる。また生姜、大根、小蓴、茄子など梅酢で漬物にするのもよい。梅酒はどこの家でも作るが、昔懐かしい「梅びしお」という副食品がある。瀬戸引鍋に梅干を入れて蕩けるまで湯煮し、裏漉して砂糖を加え、もう一度ト口火で煮込んだものだ。昭和初期の食卓には必ずと言ってよいほど添えられていたという。それに代わって梅ジャムがあり、また煮梅漬け（霊仙梅）という青色鮮やかな高級食品もある。

隠語の梅は二月で数字の2である。花札からきたものだ。関西で「梅」は2級の女郎を指す隠語だ。その語源は飛梅伝説の菅原道真を併祀する北野天満宮の縁日が25日。2級女郎の揚代が25文だったからだそうだ。また「梅干婆」と老女を蔑視する言葉もある。ふるっているのが「梅干のおかず」で、自分だけ「粹人ぶっている人」のこの意である。

日本では梅の品種は数多く作出され、梅の栽培も中国を遥かに凌いでいる。このような梅も、欧米ではほとんど顧みられない花木であるのは誠にさびしい限りである。

花言葉 「澄んだ心」、「高潔」
誕生花 一月五日

勇氣こそ地の塩なれや梅真白 中村草田男
梅に酌むかなしき酒は酔はざりし 原田青児
梅咲くや仏の国の坂いくつ 増田宇一

引用参考文献

『万葉集』

清少納言『枕の草紙』

水野元勝『花壇綱目』

小野蘭山『本草綱目啓蒙』

安田 勲『花の履歴書』

湯浅浩史『花の履歴書』『植物ごよみ』

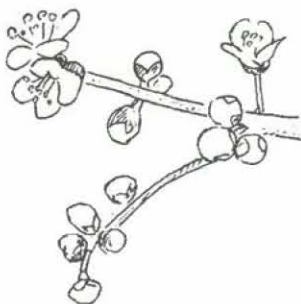
『植物と行事』

川口謙二『花と民族』

春山行夫『花の文化史』

前川文夫『植物の名前の話』『樹に咲く

花・離弁花①』



図鑑の内と外

植物私記 ②9

佐鳥 英雄

テリミノイヌホオズキ

中国は晋の時代、きこりの王質は帰り途、四人が碁を打っているのに出会います。面白がって見ているうちに時はたち、持っていた斧の柄が腐っていた。(爛柯^{らんか})という故事のことですが、王質が家に帰ると、顔見知りはい人もいなかったとか。先日ある会議にいましたら、写真集をワープロに取り入れる、その入れかたについてカンカンガクガク。いきなり、アラビア語の国に落下したような不安な気持ちになりました。ワープロができないので、毎年年賀状づくりに一苦労です。もともとネクタイを締めたり、儀式が嫌いだったりするので、改まった年頭の辞などもこそばゆくて、自分から賀状を出す事はありません。頂いたお返し程度のことなのですが、賀状の中には(旧年中は大変…、本年もどうぞ…)というだけの基本形から、ご自分の心境を句や短歌に、写真や絵に托す人や、中には漢詩

を作ってくれる友人などもいて、対応に手間隙がかります。私の場合、ハンコの部分は少し。ほとんど手書きなのでメンドウです。で、今年は一文を案じ、コピーを取り、それを貼付けしてみました。

富士山(フジヤマ・在桐生)ノ麓ニサマヨエバ、翁来タリテ落葉ヲ集ム。ヘイチャエバ兄弟)トカ。傍ノむくのきノ葉ト実、えのきの葉(実ハスデニナシ)ヲ拾ヒテ、ソノ違ヒヲ説ケバ、翁喜ビテ、ソレヲ持チテ帰ルトイフ。比ノ朝マデソノ違ヒヲ知ラザリシト。又、足許ノ草ノ実ヲ示シテ、ドロバウ草ト聞ク由、小声ニテツブヤク。我試ミニ歌ニ托シテイハク、

ドロボウ草 イタツラヲスル 準備ナラトトノヒマシタト 種ハツブヤク

私の賀状は返書のようなものですから、そのまた返書(感想など)はなく、どういうふうにかこの賀状が受けられたかはつまびらかにしません。長男からは、「何これ? お父さん トトノヒマシタ:なんてTV見てんのかな:などとカミさんが言うんで:」という反応。二女からは、「誰かの文章使ったの:」よく分かんない:」とかいう反応がありました。(何事も深く考えない)主義者の長女から

は何の反応もありません。私にしてみれば、例の(有朋自遠方来)の心の、いわば婉曲表現だったのですけれど。

私はこのように早朝、いわば不審者の一人として、山麓・人里のあたりをうろつきまです。ときに珍奇な光景に出会ったりしています。この富士山の麓では少し前、オオタカがコジュケイを食べているのを、カラスが狙っている:という三角関係を目にしています。

また早春、(10・2・26)そこより2kmほど下流(富士山は渡良瀬川右岸の山)では、トンビの交尾に出会っています。悲鳴でふり返りますと、クワの木の手近所でそういう状況でした。5分後くらいにもう一度。その時♀が悲鳴をあげます。

さて、私は少しおせっかいの性格です。おせっかいでない人との境界線の、おせっかい型のその線の内側をほんの少し入ったところくらいの感じなのですが、カミさんは、その内側を万里の長城ぐらい遠くまでいったあたり:と見なしているようです。おせっかいなので、私を誰何しなくても私から話しかけることもあります。反応はほぼ3パターンです。

①ふーん ②偉いね。 ③それじゃ教えてく

ださいな。

落葉かきの翁も、たまたま近くにあったエノキとムクノキのことを私が話してみただけのこと。翁の喜びようがことさらだったので私も嬉しかったということです。ドロボウグサのことも、足許のこの実が落葉に混ざるのではという私の問いに「そうなんです」と応じた翁から出た名前、方言です。「こんなことしてると妻に怒られますので、寝てるうちにこっそり来たんです」とか。男はどこにいても淋しいのです。

ところで、このセンダングサの仲間、なぜドロボウグサなのでしょう。ドロボウというのは逃げるのに、この草ひついてくるのだからフシギだなあ…とは私の頭。カミさんに聞いても要領を得ません。で、《日本植物方言集成》を探しました。オニノヤ・カラスノヤ・ヒツツキ・ヤブヌスビト…。そんなことがあつて、半月後くらいのこと、カミさんと厨房で忙しくしていると、カミさんが突然言いました。

「ドロボウグサって言うのね、あれは知らないまに入り込むって意味じゃないでしょうか…」

「そうか…。そうだよね」

だぶん、正解でしょう。逃げる、逃げ足速い…そういう方向に走り出した私の頭はブレーキが利かなかつたようでした。バカだなあ。

(10・12・2) 例の朝ぶらの私は、太田市のBIOTOP E近くの西長岡に車を停めていました。路傍の建設資材置き場らしきところ。狭く、小さな砂山が2つ。その砂山の枯れ草の中に、新鮮な緑で、直径2mくらいの草。ひと株なのか何株なのか、とにかく枝は立たずに這っています。何10本。花も咲いていて、白い星型の花はすぐイヌホオズキと知れますが、見かけないものでした。まだ緑なこと、立ちあがらないで広がっていること、何より黒光りする実がイヌホオズキの2倍、径10mmのこと。イヌホオズキとアメリカイヌホオズキしか知らない私は、とりあえず枝を2〜3本持ち帰ることにしました。特徴のもう1つに、枝の下方の実は1粒でなっている傾向などもありました。帰ってすぐ調べてみました。《日本帰化植物写真図鑑》にはありません。《日本の帰化植物》にもありません。《原色日本帰化植物図鑑》にあるテリミノイヌホオズキが疑わしいのですが、果の径5〜8mmなど合いません。そのうちに私の教室の一

人 清水(シミズ)さんが、《日本帰化植物写真図鑑・第2巻》なるものを買ってきてくれました。見れば、テリミノイヌホオズキであることは明白でした。(ただし、この図鑑では果の径は不明。なお、清水さんは全国新聞教育研究協議会参事として現在活躍中のかたで、その用事などで東京に行くことも多く、その折、江東区木場の帰化植物見本園に立寄ってくるそうで、私にいろいろな情報を持ち帰ってくれる元小学校教師です。)

そして私によく見えてきたのは、この仲間の数の多さと、分類がまだ途中で十分解明されていないのだ…ということでした。一番古い一九七六年の長田さんの《原色日本帰化植物図鑑》が正直で、「イヌホオズキ、テリミノ



イヌホオズキ、ムラサキイヌホオズキ、アカミノイヌホオズキ、カンザシイヌホオズキなど、この一群は似たものが多く再検討しないとよくわからない」と言っています。また、

長田さんより後の、新しい「日本の帰化植物」はイヌホオズキを除いて7種示していますが、カンザシイヌホオズキとテリミノイヌホオズキが入っていません。「日本帰化植物写真図鑑1・2巻」でも、ハゴロモイヌホオズキとムラサキイヌホオズキが入っていません。こうなる事情には、実物が見つからない、未開拓で、明瞭なものに限定した…などの事情もあるのでしょう。参考までにイヌホオズキと名のつく植物を以上の図鑑などで挙げておきましょう。

イヌホオズキ（前川さんは史前帰化とし、ふつう帰化植物扱いはいらない）・アメリカイヌホオズキ・テリミノイヌホオズキ・ケイヌホオズキ・ヒメケイヌホオズキ・オオイヌホオズキ・ムラサキイヌホオズキ・ハゴロモイヌホオズキ・カンザシイヌホオズキ・アカミノイヌホオズキ 以上10種。他にキダチイヌホオズキあり。また、「日本帰化植物写真図鑑・第2巻」には、こんな記述もあります。「日本でケイヌホオズキとされていた植物には、本

種（ケイヌホオズキ・佐鳥）とヒメケイヌホオズキの2種が含まれ、多くはヒメケイヌホオズキで、本種の方がまれである」

一般にどこどこに〇〇がある…という記述。

その種類の多さと、その違いの微妙さと、われも他人も人なので間違いやすいということとあいまって、ミスも出ます。後の人が正してくれるのを期待しても、正す作業が大変困難なことを言えば、より慎重であろうとするよりありません。私もそんなことを自戒の1つとしてやっていますのですけれど。

なお、念のため「群馬県植物誌・一九八七年」にテリミノイヌホオズキは未記載。（とちぎの植物・二〇〇三年）に記載されておりま

す。私の教室に足利市から参加している根岸（恒雄）さんによれば、二度だけ見ています。

実が大きいので」とのことでした。この人も私と同様、ほとんど毎日観察に行っているとのことでした。

なおなお、（11・1・26）例の資材置き場に行ってみますと、砂山は半分ほど削られてすでに私が見たテリミノイヌホオズキはなく、「やられた」という感じでした。幸い近くに2株ばかりあり、それから200mほど離れた、同じような場所に1株あり、全滅ではあ

りません。私はそこから枝下に山のように零れている果を沢山拾い、近くに2ヶ所、2kmくらい離れたところに2ヶ所播きました。来る夏の楽しみみの1つです。播きながら果1つを食べてみましたら、トマトの味がしました。お奨めするほどではありません。私がとくに会いたいと思うのはアカミノイヌホオズキです。ミニトマトに似ているようですから、やはり食べてみたいです。

群馬の地質

常夏の中生代

飯島 静男

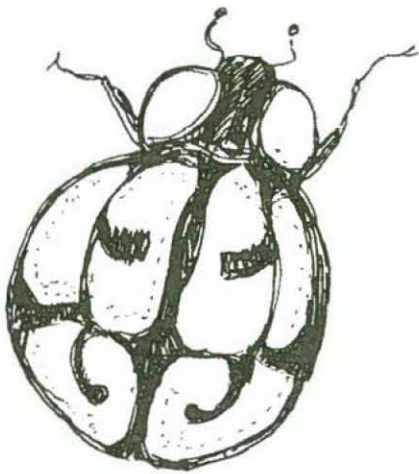
岩室層の植物化石では、木村達明先生の研究が有名である。先生は山中地溝帯の植物化石の報文も書いている。谷川連峰に中生層があると言い出した方でもあり、群馬地質研究史には欠かせない。

以前、上野村野栗の材化石のことでN先生に教えを乞うた時、木村先生著の「植物の進化」を読んだばかりだった。「あれは全然ダメだね」とのコメントをいただき、たいへんびっくりした。系統植物学の専門家にかかる、植物化石の大家も形無しだった。とは言って

も、その後も専門誌に、中生代の温帯性植物群と亜熱帯性植物群の地理的分布の圧力などが発表された。記載的データの積み上げが、見事に新しい理論的展開につながっていると感心した。

前々回あたりから、この稿を書いている、最新の化石事情に詳しい、若い専門家に、そのへんどうなっているか、聞いてみた。聞いてびっくり。内帯の中生代植物化石も、外帯のそれも、調べれば調べるほど、共通種が次々とみつき、両者にほとんど違いはないのだと。中生代頃の地球はどこでも暖かくて、みな常夏の世界だった、というのである。

ひとのふんどしですもう、に変わりはないが、ふんどしをはきかえねば、ならない。



残された自然の中で (152)

観音山鳥日誌①

谷畑 藤男

昨年(2010)4月より「観音山キャンブパーク ジョイナス」(高崎市教育委員会 青少年課)に勤務することになった。毎日観音山への通勤は定点観察の日々でもある。観音山の自然と四季の移り変わりを記録してみたい。

12月

紅葉の秋は去り、11月下旬から木々の落葉は日ごとに増す。12月に入るとスギ・ヒノキの植林地や谷沿いのツバキ・カシ等の照葉樹を除き、林はすっかり裸になる。荒久沢下部のムクノキ林では、葉を落とした枝先に黒紫色に熟した実がたわわにつく。この季節山の草木は種子散布の運び屋を求め、色とりどりの果実をつける。ムクノキの実には人気があり多数の冬鳥を引きつける。実を食べつくすまでイカル・シメ・ツグミの大群がこの林に留まった。6日にはムクノキ付近のアカシアの枝に休息するイカル80羽を数えた。白く粉のふいた実をかじってみると干し柿に似た味が

した。

以前Sさんから「冬芽観察」の楽しさを教わったが、やつと実践する場所と季節を得た。春への準備である冬芽と維管束の配列が描く落葉の跡が不思議な模様を作る。オニグルミには羊、ムクゲンジには猿そしてクズの蔓には宇宙人顔の印刻があつた。種の特徴は小枝にも施されている。

1月

キャンブ場管理棟前にある給餌台に年末から、ヒマワリ・ヒエ・アワ・キビの種子を置き、ミカンを半分に切りツツジの枝に刺してみ。17日初めてカワラヒワ2羽が給餌台下に飛来しヒエやアワをついばむ。給餌台の存在が知れたのか、自然食が乏しくなったのか飛来する種と数は増えてきた。1・2月に給餌台を訪れた鳥類は表1のとおりである。観音山野鳥の森「バードハウス」には、周囲に垣をめぐらした立派な給餌施設があり、休日には野鳥の会会員のボランティアで保護活動が展開されている。給餌台にはシジュウカラ・ヤマガラ・エナガ・メジロ・アオジ・クロジ・ガビチョウなどが入りし、ガラス越しにかわいらしい姿を見ることが出来る「周囲の環境と与える餌により、餌台に集まる種類が変

わるのでは」というテーマで比較観察したらおもしろいと思う。

19日に染料植物園駐車場付近の照葉樹の森でトラツグミ、29日には白衣観音下のアカマツ林でヒガラの群れと移動するゴジュウカラ1羽を見る。

2月

2月になると冬型の気圧配置も崩れ、本州南岸を通過する低気圧が関東に降雪をもたらせた。日本海側の雪に比べささやかであるが、12日の朝はキャンプ場の広場も白い世界。園内を点検すると、雪の重さで曲がる竹や雪上にノウサギ・キツネの足跡なども見られた。雑木林の雪上にゴマを蒔いたような黒い点。目を凝らすとトビムシが跳ねている。トビムシは昆虫に近縁な原始的グループで、土壌中に住み落ち葉を分解する。1ミリに満たない仕事人が地下で大量の落ち葉を片付けている。雪は普段見えない生物の存在を教えてくれる。

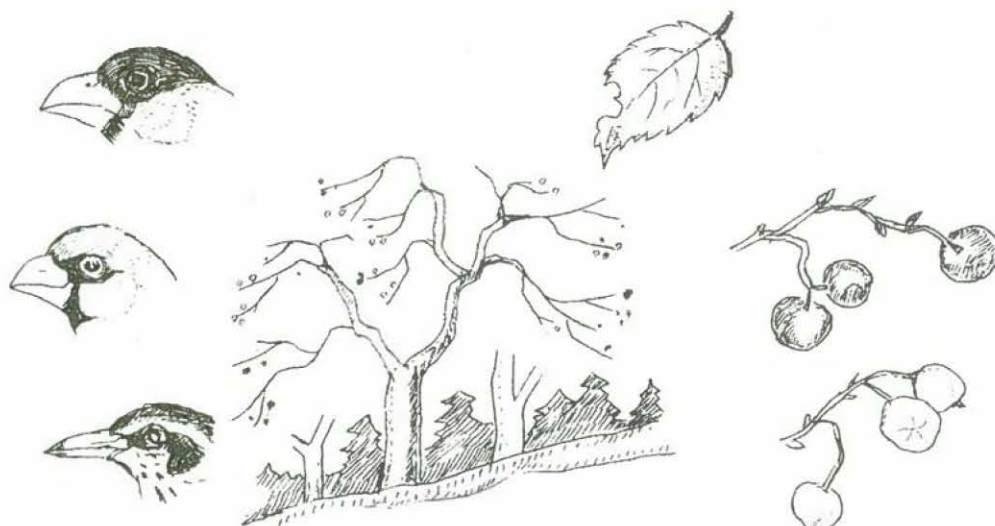
20日の朝、管理棟前のヒノキ林にマヒワの群れ40羽が飛来した。2月に入り給餌台下には数羽のマヒワは来ていたが群れは大きくなつた。ヒノキの球果をつつき小さな種子を啄んでいる。今年はマヒワの多い冬である。

表1 ジョイナス給餌台に飛来した鳥類 (2011年1～2月)

鳥 類 (科)	月 日 (天気)	備考 () 内の数は最大飛来数
ヒヨドリ (ヒヨドリ科)	1月 22日 (晴)	ミカンを独占する。 (1)
ルリビタキ (ツグミ科)	1月 26日 (晴)	台付近に飛来する。 (雌1)
ジョウビタキ (同上)	1月 26日 (晴)	台付近に飛来する。 (雄雌2)
ツグミ (同上)	1月 26日 (晴)	台付近に飛来する。 (1)
ヤマガラ (シジュウカラ科)	2月 3日 (晴)	ヒマワリ種子を頻繁に運び去る。 (2)
シジュウカラ (同上)	1月 21日 (晴)	台上に飛来する。 (1)
ホオジロ (ホオジロ科)	2月 11日 (雪)	台下に飛来する。 (雄雌2)
カシラダカ (同上)	2月 11日 (雪)	台下に飛来する。 (2)
カワラヒワ (アトリ科)	2月 11日 (雪)	台下に飛来する。 (11)
マヒワ (同上)	2月 14日 (晴)	台下に飛来する。 (4)
シメ (同上)	1月 21日 (晴)	台上に飛来する。 (1)
カケス (カラス科)	1月 22日 (晴)	ヒマワリ種子を食べる。 (2)

時折の降雪や寒さは残るが、朝夕の明るさは伸び春が確実に近づいている。2月中旬園内に自生するツバキの開花が始まり、16日には「ケッツ ケッツ・・・」と鳴くオオタカ

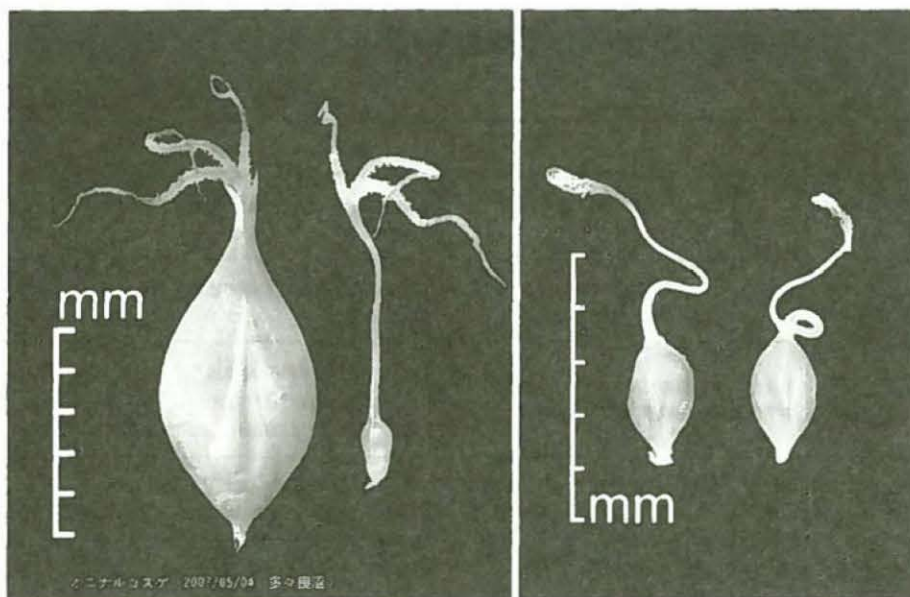
の声を聞く。23日には荒久沢の竹やぶでウグイスの初鳴き、白衣観音下南斜面の紅梅の根元では餌を探すミヤマホオジロ2羽を見る。



植物をミクロで見る (1)

オニナルコスゲ

青木 雅夫



小穂や瘦果の形がおもしろくて、最近はその観察に凝っている。瘦果の形を見ると様々で、その形から種の同定が出来るのがおもしろいと思っている。道半ばだが、少しずつ取り上げてみたいと思う。東毛の館林市ではあまり見られないカヤツリグサ科スゲ属のオニナルコスゲである。雌しべの先が3裂し、瘦果が熟してくると花柱が小穂の先から飛び出さないで、花柱がくるりとひねられるように曲がる。その形がいろいろでおもしろい。ピンセットで押さえながら柄付き針で剥くのだが、やり出すと結構はまるものである。この仲間を少し追っかけてみよう。

*

*

編集からのお願い

3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9・0の国内観測史上最大の巨大地震が発生しました。高崎でも恐怖感とともに震度5という強く長い揺れを体験しました。太平洋側の海岸地帯には地震後に津

波が押し寄せました。防波堤を乗り越え、住宅を破壊しながら耕地を突き進む津波の様子がテレビ画面に映されていました。飛行場・コンビナート・原子力発電所など先端技術施設も自然のパワーの前に無力です。自然と人間の関係や自然保護について考えさせられました。今回の地震・津波で亡くなった方もたくさんいます。ご冥福をお祈りするとともに、被害の少なかつた地区に住むものとして、被災地域の復興に協力していきたいと思っています。

今年は本連盟ができて四〇周年になります。区切りの年を記念して、次号(161号)では「印象に残る観察会」を特集します。40年間、多数の自然観察会が実施されています。ビギナーとして初めて参加した時のことや担当として苦労したことなどたくさんの思い出があると思います。ご意見等も含めて原稿をお持ちしています。

今回より青木雅夫さんによる「植物をミクロで見る」を連載します。美しい電子顕微鏡によるミクロの植物写真を紹介します。お楽しみください。

次号の原稿締め切りは6月15日です。事務所宛にお送りください。よろしく願います。

平成23年度 「自然観察会」

NPO法人 群馬県自然保護連盟

	場 所	開 催 日 時	対 象	内 容 ・ テ ー マ	集 合 場 所	定 員
①	太 田 金 山	4月24日(日) 9時～15時	一般	新緑の丘陵で春の花を見つけよう	金龍寺駐車場 (太田市金山町) 参加費300円/人 要申込	30名
②	赤城山 五輪尾根	6月5日(日) 9時～15時	一般	シロヤシオやサンリンソウなど春の花を観察しよう	赤城山大洞駐車場 (前橋市富士見町) 参加費300円/人 要申込	30名
③	妙義山周辺 こども自然観察会	7月23日(土) 9時 24日(日) 15時	小3～ 中学生	石門めぐり、昆虫・水生生物・植物観察、動物の足跡探し等	さくらの里管理事務所 駐車場 (下仁田町上小坂) 宿泊：妙義青少年自然の家 要申込 参加費：3,500円 (1泊2日：3食付、傷害保険料等)	20名
④	三 波 川	7月31日(日) 9時～14時	児童と 保護者	川遊びと水生生物、魚の観察 河川敷で昆虫、カエル等の観察	小平河川公園 駐車場 (藤岡市三波川6-5) 定員20組 要申込 参加費：小学生以上300円/人	20組
⑤	谷川岳「一の倉沢」 と 湯 檜 曾 川	9月4日(日) 9時～15時	一般	日本三大岩壁「一の倉沢」の 景観と湯檜曾川のブナ林観察	土合橋付近駐車場 (みなかみ町土合) 参加費300円/人 要申込	30名
⑥	西 御 荷 鉾 山	10月2日(日) 9時～15時	一般	秋の西上州の展望を楽しもう	御荷鉾山スーパー林道 南登山口駐車場 (藤岡市上日野) 参加費300円/人 要申込	30名
⑦	上 州 三 峰 山	10月30日(日) 9時～15時	一般	紅葉のぐんま百名山の探勝	河内神社駐車場 (沼田市宇楚井町) 参加費300円/人 要申込	30名

- ① 事前に申込が必要です。定員を超える場合、参加者は先着順となります。
 ② 朝から雨の場合は中止することがあります。
 ③ 参加には参加費が必要です。(全員傷害保険に加入します)

平成23年度 「自然環境保全地域」の自然観察と清掃活動

NPO法人 群馬県自然保護連盟

	場 所	開 催 日 時	テ ー マ	集 合 場 所	定 員
①	鳴 神 山	4月29日(金・祝) 8時～15時	カッコソウ(サクラソウ科)や ナルカミスミレを探してみよう。	駒形登山口 奥駐車場 (桐生市川内町)	15名
②	相 馬 山 黒 岩	5月15日(日) 9時～15時	早春の動植物の息吹に触れてみよう。	榛名ヤセオネ峠 相馬山登山口付近 (渋川市伊香保町)	30名
③	荒 山 高 原 荒 山	5月29日(日) 9時～15時	赤城のツツジや野鳥を探勝しよう。	赤城木の家ローラー滑り台駐車場【林道鍋割相吉線】 (前橋市富士見町)	30名
④	鈴 ケ 岳	8月28日(日) 9時～15時	赤城山の巨石と展望を楽しもう。	赤城山新坂平駐車場 (前橋市富士見町)	20名
⑤	鍋 割 高 原 鍋 割 山	9月18日(日) 9時～15時	秋の花を楽しみ、 山頂からスカイツリーを探そう。	赤城木の家ローラー滑り台駐車場【林道鍋割相吉線】 (前橋市富士見町) → 鍋割高原駐車場へ移動	20名

<注>

- ① 事前に申込が必要です。定員を超える場合、参加者は先着順となります。
 ② 参加費は無料です。
 ③ ザックに雨具、昼食、水筒を入れて各自持参してください。
 ④ 朝から雨の場合は中止します。
 ⑤ 軍手、ゴミ袋はNPO群馬県自然保護連盟が用意します。
 ⑥ 参加者は全員傷害保険に加入していただきます。(参加者の費用負担はありません)

平成23年度 自然保護対策委員会 視察予定

場 所	月 日	時 間	集 合 場 所	備 考
叶山鉱業所 鉱石採掘場	5月22日(日)	7:30 出発	群馬県自然保護連盟 駐車場	植物移植地の天狗岩に登ります
東京電力㈱ 西上武幹線現場	6月19日(日)	8:00 出発	〃	鉄塔建設地の周囲を視察します
ハッ場ダム工事事務所	未 定			

平成23年度 自然観察教室

開 催 日	開 催 場 所	テ ー マ	時 間	コ ー ス ・ 歩 程	費 用
4月10日(日) 満席の為 予約停止	花の百名山 かくたやま 角田山 481.7m (新潟県) 花の山人気度NO1の低山	田中澄江の 「新花の百名山」 雪割草(ミスミソウ) カタクリ等、早春季植物 の咲き競う花の山の探訪	出発 5:00 帰着 19:00 日帰り (雨天決行)	高崎(関越道・北陸道)→巻湯東IC→ R460, R402→平成福寿観音→角田山→ 角田崎灯台→角田浜 全長約6km、歩程:約3時間: 家族向け初級を、5〜6時間かけて観察 しながら歩きます。	5,000円 40名
8月6日(土) 〜7日(日)	日本百名山 せんじょうしき き そこまがたけ 千畳敷〜木曾駒ヶ岳 2,956.3m (長野県) 高山植物の楽園千畳敷は、 ロープウェイ開通で初心者 でも駒ヶ岳に登れる至近な 中央アルプスの山です	特産のコマウスユキソウ やクロユリ、シナノキン バイ、ハクサンイチゲ、 コバイケイソウなどの高 山植物をじっくり観察し ます。	出発 6:00 帰着 21:00 1泊2日 (雨天決行)	6日:高崎(上信道・長野道・中央道) 長野→塩尻IC→R19→木曾福島→奈良井 宿見学→エーザイ木曾駒山荘投宿 7日:エーザイ木曾駒山荘→駒ヶ根IC→ 菅の台(シャトルバス) 駒ヶ根高原・しら び平(ロープウェイ) 千畳敷〜千畳敷 (0:50)→乗越浄土→(0:35)→中岳→ (0:30)→木曾駒ヶ岳 往復	20,000円 27名

※ 会員のみの。 : 要予約。 往復とも貸切バスを利用します。 詳細は申込みあり次第郵送します。

※ 集合場所 : 上信小型バス㈱ ※ 駐車場 : 群馬県自然保護連盟駐車場&東和銀行高崎東支店駐車場

事務局日誌 (160)

12月18日	12月理事会 12名
12月20日	NPO赤城自然塾会議
12月21日	会報「群馬の自然・冬号」原稿印刷渡し
12月22日	谷川岳エコツアーリズム推進会議（みなかみ町）
12月28日	仕事納め
1月6日	会報「群馬の自然・冬号」校正印刷渡し
1月7日	県自然環境課新年挨拶
1月11日	八ッ場ダム工事事務所新年挨拶
1月13日	赤城自然塾実行委員会
1月16日	赤城姫・編集会議
1月18日	会報「群馬の自然・冬号」郵送
1月19日	赤城自然塾運営会議
1月21日	県自然環境課「観察会共催申請」
1月27日	妙義青少年交流の家使用申込み
1月29日	1月理事会 11名
1月30日	自然観察指導員研修会「高崎観音山」
2月1日	理事会議事録郵送 会報編集打合せ
2月8日	小寺弘之前知事「県民葬」
2月9日	県幹部親族葬儀参列
2月15日	赤城覚満淵ササ狩り作戦発起人会
2月18日	中部県民局 県政懇談会
2月19日	2月理事会 9名
2月21日	赤城山の自然推進協議会
2月23日	生涯学習センター「総会」会場申込み
2月26日	赤城姫を愛する集まり「新年会」
3月1日	生涯学習センター「講演会」会場仮予約
3月3日	赤城自然塾運営会議

事務局だより

23年度行事案を掲載しました。県委託事業は日程並びに広報等の関係から総会決議を待たずに実施されます。また23年度総会を左により実施します。規約により総会は定足数が必要です。出欠席通知、並びに委任状を同封しました。必ずご返答をお願い致します。

定時総会のご案内

日時 5月21日(土) 9時半～12時

場所 群馬県生涯学習センター第2研修室

前橋市文京町2-20-22

☎ 027-224-5700

講演会のご案内①

ぐんま自然観察指導員会の講演会が開催されますのでご案内いたします。

日時 4月3日(日) 13時～15時

場所 前橋市総合福祉会館第1会議室

前橋市日吉町2-1-10

☎ 027-237-1010

講師 群馬県自然環境調査研究会

里見 哲夫 氏

演題 『シダ植物の調べ方』

会費 無料

講演会のご案内②

群馬県自然保護連盟は今年で創立40周年を迎えます。40周年を祝し、記念講演会を開催します。皆様のご出席をお待ちしています。

日時 9月24日(土) 13時半～15時半

場所 群馬県生涯学習センター第1研修室

前橋市文京町2-20-22

☎ 027-224-5700

講師 唐沢 孝一 氏

NPO自然観察大学 副学長

都市鳥研究家

演題 『自然観察会の楽しさと難しさ』

副題 『自然保護と教育について』

会費 無料

寄贈図書

岸 好孝様

・「利尻・礼文等植物花図鑑」

・「クマに会ったらどうするか」

・「カラスの死骸はなぜみあたらないか」

・「鯨イルカのフィールドガイド」

会費納入のお願い

会計年度は4月1日～翌年3月31日です。皆様の力で自然保護活動の輪を広げていきたいと念じています。振替用紙を同封しました。お早めにお納め下さい。

*

*

この度発生いたしました東日本大震災で被害を受けられた多くの方々に心よりお見舞い申し上げます。一刻も早く復旧されることをお祈り申し上げます。

NPO群馬県自然保護連盟

群馬の自然 160号

発行日 平成23年4月

発行人 NPO群馬県自然保護連盟

編集人 谷畑 藤男

発行所 群馬県自然保護連盟事務所
〒370-0046
高崎市江木町610-10

電話 027-324-5706

振替 00320-6-13239

会費 2,000円(年間)